

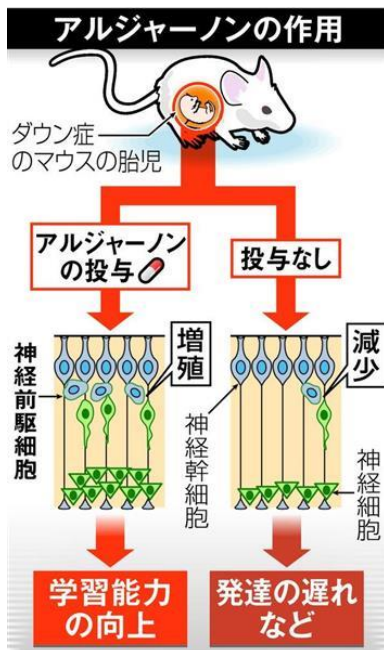


大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3880号 2017.9.6 発行

胎児期にダウン症改善 化合物「アルジャーノン」発見 マウス実験で学習能力が向上 京大 産経新聞 2017年9月5日



ダウン症の子を妊娠したマウスに投与すると、生まれた子の脳の構造が変化して学習能力が向上する化合物を発見したと、京都大の萩原正敏教授（化学生物学）らのグループが、5日付の米科学アカデミー紀要電子版に発表した。化合物の作用で神経細胞の増殖が促され、ダウン症の症状が改善されるという。

将来、出生前診断をした人の胎児を対象とした薬剤の開発につながる可能性がある。ただ、人の胎児で臨床研究を行うことの是非など、早期の実現には倫理面で課題がある。

ダウン症は21番染色体が1本多い3本になることで起き、発達の遅れや、心臓疾患などの合併症を伴うこともある。グループは、神経の元になる細胞（神経前駆細胞）が増えないことがダウン症の原因の一つと考え、717種類の化合物をふるい分けし、神経幹細胞が前駆細胞を増殖するのを促進する化合物を発見。「アルジャーノン」と名付けた。

ダウン症の子を妊娠したマウスに1日1回、経口投与すると、胎児の前駆細胞が増えるなど、投与しなかったダウン症の子とは脳の構造が異なった。迷路を使った実験で学習能力を比較した結果、投与したマウスの方が好成绩で、正常なマウスとも変わらなかった。

グループは、ダウン症患者から作製した人工多能性幹細胞（iPS細胞）でも効果を確認。脳神経が関係するアルツハイマー病や鬱病、パーキンソン病などにも役立てたいとしており、萩原教授は「すぐに臨床応用できるわけではなく、慎重に研究を進めたい」としている。

【用語解説】ダウン症 正式名称は「ダウン症候群」。21番目の染色体が1本多い3本になることで起きる。「21トリソミー」とも呼ばれる。発達の遅れや心臓疾患などの合併症を伴うこともある。約千人に1人の確率で発生するとされる。現状では根本的な改善方法は無い。

【用語解説】ダウン症 正式名称は「ダウン症候群」。21番目の染色体が1本多い3本になることで起きる。「21トリソミー」とも呼ばれる。発達の遅れや心臓疾患などの合併症を伴うこともある。約千人に1人の確率で発生するとされる。現状では根本的な改善方法は無い。

困った時に メッセージカード「SOCCA」作成 大阪日日新聞 2017年9月5日

大阪市平野区を拠点に活動する発達障害支援グループが、障害者や体調不良の人などが困った時に助けを求めるときのカード「SOCCA（ソッカ）」を作成した。公共交通機関を利用した際に、「席をゆずって」といった具体的なメッセージを明示。「無関心からちよっとの勇気を」引き出すツールにと願っている。

SOCCAカードを手にするアンバランスの元村祐子代表（左）と大柳由美子理事



作成したのは、発達障害の当事者サロンや相談事業を行う、同区喜連5丁目の「UnBalance（アンバランス）」。

SOCCAは「そっか」と気付いてもらえたらとの思いを込め、「S＝少々凶々しいけど」「O＝お願いさせて」「C＝ちょうだい」「CA＝カード」の略という。

障害者だけに関わらず、高齢者や体調不良、負傷者、妊婦など、助けが必要な誰でもが使えるカード。

援助が必要な人の目印として、府内の自治体がヘルプマークなどを無料配布しているが、十分に浸透

していない現状もある。必要な助けが明確に記されていないため相手に伝わらず、声を掛けてもらってもうまく伝えられないケースがあるという。

SOCCAカードには、「席をゆずってください」「席があいてたら教えてください」といった、具体的なヘルプメッセージが記され、「お手伝いします。声かけてね」といったカードもある。

こだわりは、カードをひっくり返すと裏面に「ありがとうございます」と記したこと。「助けてもらうことを、負い目を感じる必要はないけれど、お礼を伝えるのは人として当たり前」と、言葉が不自由な人、恥ずかしくて言えない子どももカードで、お礼を伝えることができる趣向だ。

デザインも猫のモチーフが印象的で、デザインやイラストはTORI29（トリニク）さんが手掛けた。

7月から取り扱いを始め、「弱視の人がカードを付けていたら席を譲ってもらえた」との声も。今後もアイデアを聞きながら、カードの種類や大きさなど、さまざまに増やしていきたい考えだ。

アンバランスの元村祐子代表（47）は「将来的に、このようなカードがなくても誰もが手を差し伸べ、座席に限らず、互いに譲り合えるような社会になれば」と願った。

◇カードは650円で販売中。問い合わせは電話06（6700）8161、アンバランス。

協働着々と 「大阪を変える100人会議」発足5年 大阪日日新聞 2017年9月4日



女性が働きやすい職場づくりについて発表した柳生社長（壇上左端）＝3日、大阪役所

大阪で地域課題の解決に取り組む事業者らでつくる任意団体「大阪を変える100人会議」（大阪市北区）が発足から丸5年の節目を迎えた。公開フォーラムや現場視察の企画を展開。事業形態の枠を超えて情報を共有したり、協働したりする場として発展している。

同会議は、地域課題の解決に尽力する事業者らが組織し、行政や企業、地域団体などと連携を促す役割を果たそうと2012年夏に創設された。年1回

の公開フォーラムをはじめ、各事業者の現場を訪れて学ぶ場を設けたりして活動を続けてきた。

協働プロジェクトをめぐっては、災害発生後に生存率が急速に下がるとされる72時間を生き抜く教育プログラムの普及や、学生と魅力ある中小企業をともに成長できるように

結び付ける仕組みづくりなど15件以上が誕生。子どもたちの生きる力の向上から地域振興、女性の活躍推進など多彩な領域で成果を生み出している。

3日に大阪市役所で開かれた公開フォーラムでは、協働によって生まれた8事例について関係者が報告。また、10事業者が個別に実践を紹介した。

母親が働きやすい職場環境を推進している「ドットコムホールディングス」(同市都島区)の柳生久理子社長は、子連れの勤務や、週1回の出社など母親の都合に合わせた働き方を実現している点を説明。地域の情報発信サイトの運営や、週刊大阪日日新聞で記事を執筆している業務内容を紹介し、「今回の出会いを今後の事業に生かしていきたい」と話していた。

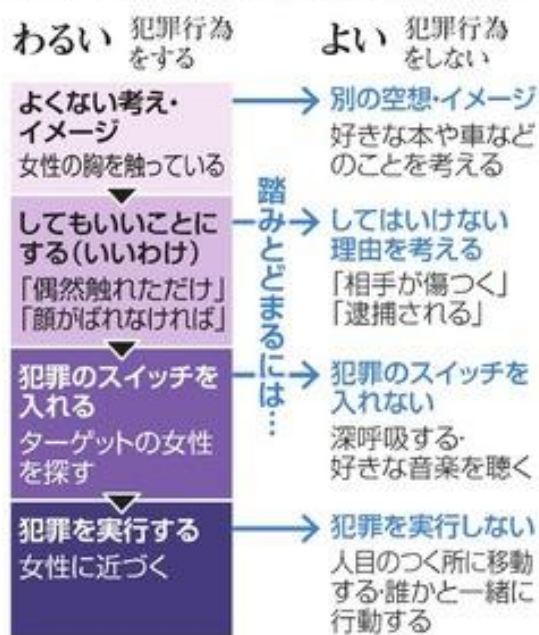
フォーラムでは、登壇者と来場者が10組に分かれて意見交換する時間を設定。取り組みの発展に向けて熱心に話し合う姿が見られた。

同会議は今後、各地域の課題に市民を巻き込んだり、各団体の悩みなどを支え合う手法についても注力していく構え。佐々木研代表は「地域課題の解決に向け、一部の人たちだけでなく、多くの市民が参加できる仕掛けをもっとつくっていかれば」と抱負を語っていた。

性犯罪の考えが浮かんだら… 再犯防ぎ新プログラムを 編集委員・大久保真紀

朝日新聞 2017年9月5日

4段階モデルを使った再犯防止計画の例



性犯罪の考えが浮かんだらどうしたらいいのか——。性被害を少しでも減らそうと、再

犯を防ぐ新たなプログラムの開発が始まった。主な対象は知的障害や発達障害を抱えて罪を犯した人。従来のプログラムでは効果が薄いとされてきた人たちだ。国立精神・神経医療研究センター(東京都小平市)が2018年度末までの完成を目指して試行中で、障害のない人にも有効だと期待されている。

「罪を犯すまでには4段階があります。そのどこかで踏みとどまるには、どうすればいいかを考えます」

8月、長崎県内の知的障害者の入所施設。

プログラムの開発者で、聖マリアンナ医科大学(川崎市)の安藤久美子・准教授(司法精神医学)の話に20~30代の男性5人が耳を傾けた。

5人は強制わいせつや強姦(ごうかん)未遂などの罪を犯し、執行猶予中や刑を終えるなどした知的障害者。県内各地から週に1度、それぞれ支援を受ける施設の職員に付き添われて集まる。

発達障害にも前向き柳家花緑、落語に「生きている」 日刊スポーツ 2017年9月5日

発達障害を告白した落語家の柳家花緑(46)が、「障害はデメリットではない」と前向きな思いを語った。

花緑は5日放送のフジテレビ系「ノンストップ!」にVTR出演。障害との向き合い方について語った。8月4日発売の最新著書「花緑の幸せ入門」で自身の障害を初めて明かしているが、哲学や人生論をつづるにあたって「どの目線で人生のことを語ってるんだって思った時に、自分の自己紹介がちゃんとできていないと不十分に思えて」と障害を告白する決意をしたという。

4年前のテレビ出演がきっかけで発達障害だと知ることになったが、「知れて良かった。知れたことによって自分の中にある劣等感がなくなった」という花緑。「障害があるっていうことにデメリットがあるかもしれないけど、でも半面、良いこともいろいろある。今、落語家という商売をやっていて多弁性が生きていますよ。障害はデメリットではなくて、その中の良い部分、突出した部分で自分が落語家という商売をやれているんだって思ったときに、これはありがたいことだなって」と語った。

花緑は最後に「思い方によって、悩みは悩みでなくなる。自分の思い方によってレッテルは良いようにも貼れるんだって、そういう思い方によって生き方は変わるんじゃないだろうか」と語りかけた。

就職説明会 障害者向け 「企業とお互い理解を」 静岡市内で /静岡

毎日新聞 2017年9月5日

障害者向けの就労支援などを行う民間企業「LITALICO」(東京都目黒区)が4日、就職を希望する障害者向けの合同企業説明会を静岡市内で開いた。同社は「就職を希望する障害者にも、企業とお互いのニーズなどについて理解を深め合う場を設けることが重要」と全国各地で合同説明会を行っている。県内での開催は初めてという。

障害者解雇「寄り添う支援を」 倉敷市議会開会、市長が決意

山陽新聞 2017年9月5日



開会した9月定例倉敷市議会で障害者解雇問題について決意を述べる伊東市長

9月定例倉敷市議会は5日、開会。会期を22日までの18日間と決めた後、46億400万円の2017年度一般会計補正予算案など13議案を上程した。伊東香織市長は提案理由説明の中で、市内の就労継続支援A型事業所5カ所が閉鎖し、障害者約220人が解雇された問題について「今後も(解雇者に)寄り添った支援を行う」と決意

を述べた。

伊東市長は「220人余りが離職を余儀なくされたことは大変遺憾」と指摘。「一日も早く自分に合った再就職先を見つけ、安心した生活を取り戻してもらうことが最も重要」とした上で、解雇された障害者を対象にハローワークと連携して開いた合同就職面接会などを挙げ、引き続き支援に取り組む姿勢を示した。

A型事業所閉鎖の原因究明については「国、岡山県と協力し、廃止となった経緯を調査している」と説明。事業所の運営者に対し、障害者の再就職先を十分あっせんするよう勧告していることに触れ「今後も指導していく」と強調した。

倉敷市では、一般社団法人「あじさいの輪」と株式会社「あじさいの友」(いずれも同市片島町)が7月末にA型事業所を閉鎖。同グループで高松市の2事業所も7月末に廃業し、障害者59人が解雇された。

9月定例会は国産ジーンズ発祥の地とされる児島地区をPRするため、市幹部と市議がデニム衣料を着用して臨む恒例の「ジーンズ議会」。10日まで休会、11日から一般質問

に入る。

「3割が赤字、過去最悪」 老施協が介護報酬アップを要望
福祉新聞 2017年09月05日 編集部 老施協ホームページ



全国老人福祉施設協議会（石川憲会長）は8月23日、厚生労働省に2018年度の介護報酬改定と予算要求に対する意見書を提出した。特別養護老人ホームの赤字施設は過去最悪の3割超となり、職員の労働環境改善や新たな設備投資を行うことが難しい状況にあるとして本体報酬の引き上げを求めた。

特養の外部からの医療提供については慎重な議論が必要だとした上で、看取りを推進するため看取り介護加算のさらなる充実や配置医師の体制に対する評価などを求めた。

人材関連では介護職員が行う医療行為の拡大とその報酬上の評価を要望した。また職員配置について専任の規定を創設して同じ拠点内であれば他の事業にも従事できるよう検討すべきだとした。

介護職員処遇改善加算については、少なくとも生活相談員や看護職員など直接処遇を行う職員は対象とするよう求めた。

また05年度に食費と居住費の利用者負担化に伴って設定された基準費用額の増額を要望。食費は利用者1人当たり1日平均1442円に設定されているが、特養の食費収入は1375円で差額の67円（定員80人だと年195万円）は事業者が負担し続けているとしている。

日常生活継続支援加算の要件の整備、介護ロボット・ICT（情報通信技術）活用の財政的支援、地域包括拠点としての通所介護の評価なども求めた。

なお、老施協は高品質サービスを言語化するため会員22事業所・利用者57人の事例を調査。ICF（国際生活機能分類）の「活動」「参加」と「心身機能」の関係を調べると、心身の改善は困難でも本人の望む生活に近づけるケアをした結果、「伴走型介護」の成果がみられたという。

袖ヶ浦「更生園」指定管理者変わらず 千葉県、養育園と分割目指すも

千葉日報 2017年9月5日

更生園・養育園の指定管理者について説明する県障害福祉事業課職員＝千葉県庁記者会見室



知的障害がある入所者男性＝当時（19）＝が職員に暴行を受け死亡する事件があった千葉県立福祉施設、袖ヶ浦福祉センター「養育園」と隣接する「更生園」について、千葉県は4日、来年度からの指定管理者に引き続き千葉県社会福祉事業団を選定したと発表した。同事業団は事件発生時の指定管理者。県は両施設の分割運営を目指していたが、他に応募がなかった。

養育園（定員40人）は高校卒業未満の障害児が、更生園（同90人）はそれ以上の重度の知的障害者が入所する施設で、いずれも指定期間は来年度から5年間。この間の指定管理料は養育園が9億3900万円、更生園は25億3200万円。

県は、ことし4月18日から6月30日まで両園の指定管理者を募集していた。再募集はしなかった。選定に向けた外部有識者の意見聴取会では同事業団の評価はいずれも基準を上回っている。県は「外部専門家の派遣により職員の質が向上した」と改善を強調している。

ただ、2014年8月の第三者検証委の答申で、両施設の分割運営や定員縮小が求められていた。更生園では定員削減が進んでいないが、今後、同事業団がグループホームを立ち上げ、入所者の移行を図る方針。

養育園では13年11月、入所者男性が職員の暴行を受け死亡。その後の県の調査で04～13年度までの10年間で15人の職員が23人の入所者を虐待していたことが分かった。死亡事件に関わった5人は退職しているが、軽度の虐待事案に関わった職員2人が在籍している。

同事業団の相馬伸男理事長は「事件から4年、指導・助言を受けながら改革改善に取り組んできた。（次期5年間は）これまでも増して、事件を起こした事業者として事件と誠実に向き合い続け、さらなる暮らし・支援の高みを目指して努力を重ねていく」とコメントした。

暴力、暴言ひどくなる「抗認知症薬」 減薬は主治医と相談 東京新聞 2017年9月5日

服用する際の注意点を示す縦書きのテキストと薬のイラスト。

- ✔ 薬を飲み始めた時、患者が急変していないか確認する
 - ✔ 薬の減量や中止は主治医や専門医に相談する
 - ✔ 本人への接し方や介護の方法なども考える
- ※新井教授の話をもとに作成

認知症の進行を遅らせる効果がある「抗認知症薬」の服用により患者の暴力や暴言がひどくなったと悩む介護者が少なくない。次第に激しくなって薬の減量や中止に踏み切る人も。厚生労働省は昨年、抗認知症薬の投与を規定量未満に減らすことを認めたが認知症が進行する可能性もある。薬を減らす場合は主治医と十分に話し合う一方、薬以外に原因はないか慎重に見極める必要がある。（出口有紀）

四年前にアルツハイマー型認知症と診断された妻（69）を介護する愛知県の男性（70）は八月上旬、抗認知症薬の量を半分に減らしてもらった。おとなしい性格だった妻が、抗認知症薬の服用を始めてから、感情が異常に高ぶりやすくなったためだ。最近では男性への暴力だけにとどまらず、道端で談笑している近所の人たちに「うるさい」などと暴言を吐くなど、感情の高ぶりは次第に激しくなっていた。

主治医に相談したところ、薬を減らすよう勧められ、減薬に踏み切った。「蹴ったり殴ったりはおさまらないが、怒らなくなったかな」と男性。薬を減らすことに不安は残るが、三カ月後の次の受診日までは様子を見ることにしている。

国内で承認されている抗認知症薬は現在、四種類。脳の神経伝達を維持したり、神経細胞の損傷を防いだりすることで、物忘れなど認知症の症状の進行を遅らせる。初期の段階から服用すると効果が高いとされる。

ところが、脳の働きが活発になることで、意欲をつかさどる部分が活性化され、暴力や暴言、妄想、徘徊（はいかい）などを増幅させてしまうことがある。

ただ、感情の高まりは薬だけが要因ではなく、日本老年精神医学会理事長を務める新井平伊（へい）・順天堂大学院教授（64）は「患者の性格や置かれた環境なども影響する」と話す。薬の影響も人によって異なり、実際に薬がどの程度、患者に作用したかを知るのには難しい。

では、どうしたらよいのか。新井教授は「患者の様子を注視するしかない」と話す。「認知症は数日では進行しない。患者の様子が急に変わったとすれば、薬が原因と考えられる」

医師は患者の日常生活の様子を継続して見られないため、薬の減量や中止を決めるのは、最終的に本人や家族の判断になる。新井教授は「薬を続けたいなら、別の抗認知症薬に替えることもできる。決めるのは本人や家族だが、薬の減量や中止で認知症が進行する可能性もあるので、専門医に相談してほしい」と話す。

家族の接し方が、患者の暴言や暴力を引き起こしている場合もある。

愛知県で認知症の妻（71）を介護する男性（77）は、妻の徘徊や暴力、暴言がひどかったため、主治医に相談すると「薬が合わないのかも」と言われた。一カ月中止すると、妻の攻撃性が消えて機嫌が良くなった。当初は一度中止した後半量を服用する予定だったが、思い切って薬をやめた。

同時に、妻への接し方も変えた。会話の中で妻の勘違いをいちいち指摘し、言い争うことが多かったが、やりたいようにやらせることにした。男性は「にこにこして、妻をおだてるようにすると、おだやかになった」と話す。

抗認知症薬や患者の性格、家族との関係…。認知症患者の心の動きや行動に影響する要素は多様で、症状を把握するためには細かく患者を観察することが必要だ。感情が不安定で暴力や暴言に発展する場合は、いつ、だれが対象なのかなど細部を見るほか、日ごろの食事量や食べ方などにも気を配り、食欲不振になっていないかも確認する。

これらを把握した上で、主治医や薬剤師、ケアマネジャーらに相談する。家族に暴力を振るう場合は、デイサービスを活用するなどして、家族以外の人に接する機会を増やすのも有効だ。新井教授は「介護やケアで、いい状況につながることもある」と話す。



性への興味「タブー視しないで」 障害者向けセミナーを計画

福井新聞 2017年9月5日

「恋愛も、障害のある人がコミュニケーションを学ぶトレーニング」と話す東みすゑさん＝福井市内

「僕たちも恋愛していいんですか」。福井県内の特別支援学校の寄宿舎指導員を長年務め、県内外で障害のある人の性教育に取り組んでいる東みすゑさん（67）＝福井市＝は、ある男子生徒に問いかけられた。「人を好きになったり、性的なことに興味を持ったりするのは、成長過程の一つ。人間らしい自然な気持ちだと知ってほしい」。9月末から2月にかけて福井市で、障害のある若者向けの初めてのセミナーを計画している。

東さんは約10年前、学校の教職員や福祉施設、事業所の職員、保護者らで、障害のある人の性を学ぶグループ「ゆいの会」を立ち上げた。活動を通じて、「支援する側に否定的な考えがあり、性の話題をできれば避けたいとタブー視している。障害のある人が知識を学ぶ機会がない」と気付いた。

思春期の心身の変化に戸惑い、いらつき、周囲とトラブルを起こす。人前で性器をいじ

ったり、むやみに異性に抱きついたり、下着の中をのぞこうとしたりする。一方的に好意を寄せてつきまとったり、避妊せずに性的関係を持ったりする人もいる。こうした「問題行動」が職場などでトラブルになるケースが少なくない。

東さんは、問題行動の多くは性教育を受けていなかったり、誤った指導を受けたりしていることが原因と指摘する。「自分の体を知りたい、コミュニケーションの取り方が分からないなど、教えてほしいという意思の表れ。否定したり、禁止したりするだけでは絶対に解決しない」。支援する側がきちんと向き合えば、信頼関係を築くことにつながるという。

東さんらの指導を受け、自分が過去に知人から性的虐待を受けていたことに初めて気付いた女性もいる。「正しい知識があれば、性被害を防げる可能性がある。信頼して相談できる人が周囲にいることが大切で、セミナーは支援する側にとっても学びの場になる」と多くの参加を呼び掛けている。

セミナーは、9月30日、10月28日、11月25日、12月23日、2月24日の全5回で、いずれも福井市のアオッサ内の市地域交流プラザで午後2～4時に開く。自分の心と体、命の大切さ、妊娠や性感染症の知識、人を好きになる気持ちや人との付き合い方などを伝える。

障害者と住民きさいや 宇和島、商店街に交流の場「カフェ」オープン

愛媛新聞 2017年9月5日

宇和島市内の商店街にオープンした「アトリエ やつしかふえ」

【陶芸販売、小物作り体験も】

障害者と地域住民が気軽に交流できる場をつくらうと、社会福祉法人「八つ鹿会」（毛利健二理事長、宇和島市和霊元町2丁目）は3日、同市中心部の商店街に「アトリエ やつしかふえ」をオープンした。カフェに加え、障害者が作成した陶芸作品の販売や、小物作り体験も可能で「多くの人が集う憩いの場所になればうれしい」と期待している。

同市中央町2丁目の袋町商店街内に構えたカフェは、コミュニティースペース「スペースゆう」を活用。同スペース所有者が「より有効に使ってほしい」と同法人に利用を呼び掛け、実現した。

カフェは2階建て計約42平方メートル。1階はコーヒーやジュースなど全ドリンクを200円で提供するほか、法人運営の工房で利用者が作成した陶芸作品などを販売。海岸漂着物などで小物を作るシーボーンアート体験もできる。2階では、10月から第1、3土曜にシーボーンアート教室を開講予定。職員1人と利用者3人が常時スタッフとして対応する。

3日にはオープニングセレモニーがあり、関係者約40人が出席。同市愛宕町1丁目の公務員松本好弘さん（55）は「利用者の作品を気軽に見られる場が今までなかったので、よかった」と大歓迎。

毛利理事長は「障害者が元気に楽しく働きながら地域の人と交流できる、新しい形の福祉の店にできたらいい」と話している。

営業時間は午前10時～午後4時。毎週木曜日が定休。

